

「平産」から「安産」へ

鈴木丹士郎

—

以前に、江戸後期の儒者広瀬淡窓の懐旧録・自叙伝とでも称すべき『懐旧楼筆記』の漢語について考察し⁽¹⁾、その中で「安産」(「苦しまないで出産すること。無事にお産をすること。」「大辞林」三版)についても述べたことがある。その際、同義語の「平産」(「安産」に同じ。『大辞林』三版)との関係についても若干触れたが、意を尽くさぬ憾みがあり、改めてまず「平産」、「安産」がどのように用いられているのかを、だいたい時代順に見て行き、この二つの語がどのような使用状況を示すのか、その傾向を通覧することから始めることにする。

用例は、漢字は今日通行の字体に、合字は通行の仮名に改めた場合が多い。『大日本古記録』『平安遺文』『鎌倉遺文』所収の史料については、それぞれ東京大学史料編纂所フルテキストデータベースを利用した。これらの史料の用例で、(一)、または「」で注記のあるものは原本記載のままである。

近松門左衛門の浄瑠璃の用例は『近松全集』(近松全集刊行会編纂 岩波書店)に拠った。しかし、編纂者が付した本文の左がわにある漢字(振り漢字)および文字譜は省略した。

草双紙の用例の表記については依拠した本文にほぼ従った(原表記に戻すことはしない)。

最初に、「平産」について見ることにする。藤原師輔の『九曆』逸文に、

伝仰云、息所平産、是依和尚祈念也（天曆四年_{九五〇}五月廿九日）

とあり、これが「平産」の早い例のようである。藤原行成の『権記』に、

罷出、今日参左府、奉維摩会文等、参東宮、次詣宣耀殿、奉訪平産給事（長保元年_{九九九}十月十九日）

とあり、藤原実資の『小右記』には、

七日、己亥、丑終許資平告送云、室有産氣者、不経時剋、重告平産由、北宅、女兒（長和二年_{一〇三二}一月七日）

而此巳時許承有氣色之由、馳向之間、午剋許平産、為悦不少、但非男子（長和五年二月廿三日）

二日、辛亥、戌剋許宰相告送云、尚待平産、不聞男女（万寿二年_{一〇三五}八月二日）

資頼妻従去夜有産氣由云々…（略）…只今平産申時、男子者（同 十一月五日）

のように見られ、合計九例を数える。

次に、藤原宗忠の『中右記』には、

十六日、亥剋許平産男子也（寛治元年_{一〇八七}三月十六日）

九日、申時許平産、女子（同 二年四月九日）

十九日、丑時男子平産（同 五年八月十九日）

及深更帰家之後、上野前司邦宗令走人告送云、女御只今平産令遂給了、就中皇子降誕者、…（略）… 従去十

三日夜微々其気色、従今日申時以後急々御気色也、子剋平産者（康和五年_{一〇三三}正月十六日） *注に『』は朱

書の範囲を示す、とある。）

のようであり、合計十一例見られる。

また、九条兼実の『玉葉』にも、

卯刻許平産男 相続後物又平安（仁安二年二六七月十六日）

自二卯時許一有_二産氣一、召_二遣陰陽師醫師等_一了、非_二殊事_一之間、人々安堵、辰刻許、無_二辛苦_一平_二産女子_一、暫而後物成了（承安三年二七三月廿三日）

とある。

以上のように、「平産」は平安時代の公家の日記・記録に多く見出すことができる。

さらに史料の性格は異なるが、平安時代の法制書『政事要略』にも見られる。

寛弘五年。中宮懷任。左府差_レ使_二賚_二料物_一。令_レ行_二放生_一。皇后者左府藤原道長公之娘也。此_レ経文上説_下供_二養如来_一平産之由_上。下説_下放_二諸生命_一除_レ病之由_上。仍所_レ行_二敷_一。為_レ示_二後代_一。（二十三、年中行事八月下・石清水放生会、年代年期は不明）

十二世紀以降の鎌倉時代においても「平産」が見出せるのは公家や貴族の日記・記録類である。

近衛家実の『猪隈関白記』に、

或女房亥時許有_男子平産事（承元四年二二〇五月四日）
（藤原兼経の母）

藤原兼経の『岡屋関白記』に、

左大臣婦人有_{産事}、男子、行向相尋之、聞平産之由了還幕門（建長元年二四九二月廿六日）
（藤原実有女）

藤原経光の『民経記』に、

辰刻許、女房母儀有_{平産事}、驗者賜祿、率爾被行大土公祭御祓之間、每事無為也、珍重々々、男子平産、尤以神妙也（寛喜三年二二二八月卅日）

献神馬、有_{千度御祓}、及寅刻御平産（文永四年二六七月二日）

吉田経俊の『経俊卿記』に、

今日神馬氏三位・八幡・賀茂許被引之、無程御平産之間、御祈等不及広敷（宝治元年三四七月九日）
に塗抹書直のしるしあり、とある。 *注、「位」

女房平産事

天晴、今日女房有産氣、丑時平産、女子也（文応元年三六九月十七日）

近衛基平の『深心院関白記』に、

フチノ重昭

天晴、寅刻許女房有産氣、卯時男子平産也、後物頗遅々、然而無殊事也（文永二年二月十三日）

それぞれ、「平産」がみとめられる。

また、鎌倉幕府の事績を記した史書である『吾妻鑑』にもしばしば「平産」を見出すことができる。

酉剋。御台所男子御平産（也）。（寿永元年三八八月十二日、「也」は補）

今日未剋。相州室伊賀守男子平産。左京兆（元久二年三〇五月廿二日）

去十二日中宮特筆家御平産。皇子降誕之由申レ之云々（寛喜三年二月廿一日）

廿一日丙戌。天霽。辰刻御平産也。若君。（延応元年三九十一月廿一日）

同十二日寅剋刻夢白髪老翁告二法印一曰。祈念所之懷婦。来五月十五日酉剋。可二男子於平産一也云々（建長三年五

月十五日）

六日乙亥。晴。寅剋。相州室平産姫公一。（同 六年十月六日）

次に『鎌倉遺文』の文書について見ることにする。用例をあげるまえに、まず竹内理三編『鎌倉遺文』古文書編第二十八卷（東京堂出版）の序の一部を見てみよう。

持明院統の後深草上皇の崩御に対し、大覚寺統では、乾元二年（三〇三、筆者補）五月九日龜山法皇の皇子恒明親王の誕生があつた。母は、西園寺実兼の女昭訓門院瑛子である。瑛子の兄公衡は、御産に関する勘文・注文を集めて、昭訓門院著帯記・同御産愚記をのこしたが、その注文・勘文は、乾元二年正月二十三日撫物結番注文（二二三四二

号、数字は文書番号。用例見出しの数字も同様〔筆者補〕（以下数十通に及ぶ（一頁））

勿論、この時代に限ったことではなく帝位を継ぐべき皇子誕生への期待、平安な出産の祈願、出生の結果などは関係する人々にとつて極めて重大な関心事であった。『昭訓門院御産愚記』の占卜の文に「御平産」が見られるが、その一、二をあげると次のようである。

○二一四四〇 安倍淳房占文

御平産可為何比哉、

占、今日己卯、時加申、奉仰日時、大衝臨卯為用、将六合、中神后、天一、終勝光、天空、卦遇伏吟龍戰三交、

推之、来月中丙丁壬癸日、可有王子御降誕乎、

乾元二年卯月廿一日

○二一四四二 賀茂在藤占文

御平産可為何日哉、

占、———同前、

推之、五月節中子午辰戌日可遂御乎、

乾元二年四月廿一日

「御平産」は他に「安倍重親占文」（二一四四二）、「賀茂在冬占文」（二一四四四）、「安倍泰光占文」（二一四四五）などにもみとめられる。

また、『広義門院御産記』にも「御平産」がしばしばみとめられる。

○二四一八〇 主計頭賀茂在藤占文

（藤原筆字）

御平産可為何日哉

占、———

推之、二月節中巳亥丑末日、可有皇子御降誕乎、

延慶四年_{一三二二正月}

○二四一八三 散位安倍有雄占文

(藤原筆子)

御平産可為何比哉

占、――

推之、以丙丁壬癸日、可有皇子降誕乎、

延慶四年

これら占文の中に「皇子（御）降誕」の文言が見られるが、「降誕」（誕生も）^②は平安時代には皇子について用いられるのが普通で、鎌倉時代にもそれが受け継がれており、「降誕」とともに用いられる「平産」の方も敬意の高い語であったと考えられる。

十四世紀末、南北朝時代の、三条公忠の『後愚昧記』にも「平産」が見られる。

五日、天晴、酉刻終程_{（息女三條殿平）}上 臈有気分、戌初刻平産_{皇女}了（永徳元年_{一三八一}八月五日）

この記述のあとに続いて、

易産之条為悦々々

のように「易産」の語もみとめられる。

十五世紀、室町時代に入って、後崇光院（伏見宮貞成親王）の『看聞日記』^③（看聞御記とも）には「平産」がしばしば用いられ、応永二十四年_{一四七二}二月五日から永享六年_{一四三四}十月五日までの記事で十六例を数える。その若干例を見ることにする。

十八日。晴。今夜女官_{賀々}。平産男子云々。重有朝臣兩月相統連子。重疊繁昌且数奇之至珍重也。（応永廿七年四月十八日）

十四日。晴。曉二條殿産所（産所）。退出。辰時平産（産所）。姫宮云々。無為先珍重也。但近日世二若宮難得也。而姫宮無用不運之至也。（応永卅年十二月十四日）
（宣成王女）

抑二條殿今夜丑剋平産。若宮誕生。殊以無為珍重也（応永卅二年十二月十九日）

抑南御方平産。（成刻） 姫宮云云。無為珍重。但姫宮飽滿厭却也。産所庭田也（永享二年十一月十五日）

次に、仏教説話の『地藏菩薩靈驗記』（十六世紀後半の成立）には、

当月ニナリテ十八日ノ早旦端（サウテンシゴク）嚴ノ女子ヲソ平産シケリ（ヘイサム）（五・十二）

とあるが、同作品には「平産」と同義の「泰産」の語もみとめられる。

「平産」が平安時代および鎌倉室町時代において記録体の文章にしばしば用いられていることは先に述べたが、これに当たる言い方は仮名文や仮名交じり文ではどのようなものであつたか、について若干触れることにする。

『落窪物語』に、

はかなくとしかへりて、正月十三日、いとたいらかにおのころうみ給へれば、いとうれしとおぼして（二）

とあり、『源氏物語』（源氏物語大成）にも、

やよひの十よ日の程に、たいらかにむまれ給ぬ。（若菜上）

とある「たひらかにうむ」「たひらかにむまる」が「平産」に対応する言い方であろう。『源氏物語』に、ほかに、

三月ついたちのほど、このころやおぼしやるに、人しれずあはれにて、御つかひありけり。とくかへりまいりて、十六日になむ女にてたいらかにもおし給ふとつけきこゆ。（濤標）

とある「たひらかにもおし給ふ」といふのも文脈から「ものす」は、若菜上と同じ動詞（むまる）に相当することがわかる。

十二世紀前半に成立した仮名交じり文の『今昔物語集』（新日本古典文学大系）では「平産」に対応する言い方に多

少のバリエーションが見られるようになる。

a 月満テ平ニ子ヲ産ツ。(卷十六・十七)

糸殿シ気ナル男子ヲ平カニ産ツ。(卷二十六・二)

程モ無ク平カニ産ツ。(卷二十七・十五)

b 御子平ニ生レ給ヘリ。(卷四・三)

遂ニ平カニ生レリ。(卷十二・三十四)

c 月満テ平ラカニ女子ヲ産セリ。茅上、平ラカニ産セル事ヲ喜テ(卷十二・二)

d 産ハ安キ也。(卷四・三)

a は「平らかに産む」、b は「平らかに生まる」で仮名文に見られるのと同じであるが、c は「平らかに産す」で、サ変動詞「産す」が用いられている。また、d は「安産」が生じることに関係する言い方かと思われるが、今は指摘するにとどめておく。

また、『枕草子』には、

鐘かねの声、ひゞきまさりて、いづこのならんとおもふ程に、やんごとなき所の名うちいひて、御産さんたいらかになどげん／＼しげに申たるなど、すゞろに、いかならんなどおぼつかなく、念ねんぜらるかし。(正月に寺にこもりたるは)のように「御産さんたいらかに」が見られる。「御産ごさん」は、皇后、中宮、また貴族の女性をうやまつてその出産を言う語であるが、これは「やんごとなき所の名うちいひて」(高貴な方の名前を言つて)、無事出産の加持祈禱にはげむ僧の言葉である。

「御産たひらかに」は記録体の公家の日記などに、

七日、丁酉、曉更人々云、中宮御産平安遂給云々(小右記、長和二年七月七日)

去夜子時中宮御産平安已了(同)

などと見られる「御産平安」に相当するものであり、『九曆』逸文に、

以書状付少納言乳母命婦、令奏男皇子平安産之由（天曆四年五月廿四日）

とある「平安産」も同様である。

「御産平安」はのちの『平家物語』などへとつながる言い方である。

御産平安、皇子御誕生候ぞと、たからかに申されければ（三、御産）

承保元年十二月十六日、御産平安、皇子御誕生有けり。（三、頼豪）

三

「平産」は江戸時代にはどのような様相を示すのであろうか。まず、伊達綱宗の書状『伊達家文書』大日本古文書家わけ第三）に次のように見られる。

一筆申述候、然者奥方平産之段、達上聞、御懇^{〔福業上聞〕}美濃守殿へ、上意之由承、扱々難在、大悦不過之奉存事^二候（陸

奥守宛、天和元年^{一六八一}七月十八日）

此度奥方平産付^而、鹽竈社亀岡八幡宮^江為名代、以伊達将監御太刀馬代砂金献納之由（松平陸奥守宛、貞享四

年^{一六八七}九月廿五日）

殊更子共壹人^ハ持、惣領男子、家中之者共も安堵之上^三候へ、登り候上、平産候^二迎も苦間敷候哉、来春平産之上

ハ、百日も過不申候而ハ、乗物^ニて道中彼是難成存候（陸奥守宛、元禄元年^{一六八八}七月廿八日）

さらに、法光院<sup>永井尚房
夫人立花</sup>の消息にも見られる。

御留^{〔頼〕}い様^ニも、するく^一と御平さん（貞享四年か）

ところで、伊達綱宗の書状に「安産」も用いられていることが注意を引く。最初に引いた「平産」の例（天和元年）が、

奥 方 安産、殊男子誕生候て、目出度儀不過之候(陸奥守宛、天和元年七月十五日)

のように同じ男子(扇千代丸)の誕生に対して「安産」が用いられている。「安産」については後で述べるが、「安産」は「平産」よりもその出現はかなり新しいと思われる。その中であつて伊達綱宗書状に見られる「安産」はその早い例であろう。この時期でも依然として「平産」が優勢であつた。

江戸時代に入ると「平産」がみとめられる文献・資料の範囲が広がり、文学作品においてもいろいろのジャンルにわたつてゐる。井原西鶴の浮世草子について見ると、

諸神に祈誓(しよじん きせい)をかけ。平産は身の養生(へいさん やしやう)是を大事と。ことになれたる祖母(ばば)を雇(やと)ひ腹帯(はらそひ)のしめ加減(げん)。庭(には)はたらきに身をこなし。(本朝二十不孝・三、貞享三年)

三年の契(ちぎ)り浅(あせ)からず男子(なんし)を平産(へいさん)あり。名を市丸(あちまた)と改め後喜(こうき)の祝(いは)ひをなしけるに(武道伝来記・一、貞享四年)
女(め)けはしくはしり来て姪御(めいご)さま只今安(やす)くと御平産(へいさん)あそばしました御(ご)しらせ申(まう)す(世間胸算用・五、元禄五年)
何(なに)ほどかなしき一日暮(く)しのうら屋住(やま)あせし人の平産(へいさん)にも。米一斗と銭(ぜに)八百は入物(いりもの)にして置(お)しに(西鶴織留・六、元禄七年、他に一例ある)

これらのほかに『懐硯』、『男色大鑑』(二例)、『好色盛衰記』などにある。また『俳物種集』(延宝六年(二七人))にもみとめられる。

平産はまた此中のあらち山(吉野) 扇雪

骨はかり成笠置の城山

仮名草子の『諸国百物語』(延宝五年)に、

その頃、女房懐妊にて有りしが、ほどなく平産せられ、まことに嘆きの中の喜びにて(五)

とあり、咄本には、

そのうちにも、たゞ女はうの事をおもひ、なにとしてかへくらすやらん。へいさんハしたるかど、あんじくらし

ていたりけり（宇喜藏主古今咄揃・五、延宝六年）

こなたハ子をうむたびに平産であらうといふ（当世手打笑・一、延宝九年）

やすく御平産、ことにおのこゞ御座るなどいければ（枝珊瑚珠・五、元禄三年）
などである。

次に、近松門左衛門の浄瑠璃における「平産」の使用を見てみよう。合計二十数例あるが、西鶴の浮世草子・俳諧と同様に「安産」は見出せないようである。

よつて中宮御へいさんの御いのり。しよしやのほうべい多き中にかすがのみやへは。ごん大なごんとうの中將発向にて（三世相・一、貞享三年五月上演）

平産有てもばゝが祝ふが式作法と。まくの内へ手をさし入赤子引出しだき上て（孕常盤・三、宝永七年一七〇〇上演、この作品には「平産」が四例見られる）

産所へは男をよけ女計にして。其人のきをゆるめてこそ平産も有物。あら男に取まかれ気血とごこほり。難産の上あやまちも候て（癩静胎内摺・三、正徳三年一七三三閏五月上演）
この作品には「平産」が四例見られる）
千歳をふるものゝ生血を取。はらみ女にあたふれば其まゝ平産（浦島年代記・一、享保七年一七三三上演、この作品には「平産」が二例見られる）

以上のほかに『薩摩守忠度』、『源れいぜいぶし』、『釈迎如来誕生会』、『娥歌かるた』、『国性爺合戦』、『国性爺後日合戦』、『善光寺御堂供養』（二例）、『傾城酒吞童子』、『本朝三國志』（四例）などに見られ、さらに近松の歌舞伎狂言『傾城壬生大念仏』にも、

そちがへいざんしたと聞たれ共、今迄あふた事もないに、我が手にかけころして、しにがほでたいめんするは何事ぞ（元禄十五上演）

とある。「平産」はヘイザンとも読んだことがうかがわれる。仏教説話『善悪因果集』（正徳元年）にも、

夜明ヌレバ、彼ニ至テ件ノ家ヲ訪フニ、妻即男子ヲ平産セリト云（四）
のようにヘイザンの例が見られる。

『地藏菩薩応驗新記』（宝永元年）には、

翌朝聊も悩む所なく、快く平産しけり（中末）

老母例の如く平産せざらんことを深く歎き（下末）

とあるが、「安産」も二例用いられている。

また、錦文流の浮世草子には、

親土右衛門江戸やへ行て、男子平産のよしことはれ共（棠大門屋敷・四、宝永二年）

主人手をかけ男子を平産仕候（徒然時勢粧・七、享保六年）

平産の後金五十両祐光のわきざし巻腰、親子の縁を切候印につかはし候上は（同）

とあり、江島其磧の『傾城禁短気』（正徳元年）には、

御平産の御祈禱に、御茶引てござる（四）

女郎の腹にやどつたぬしの子、さきほど平産いたしたゆへに、お約束の通り赤子様をつれて参つた（同）

とあるほかに「平産」が五例見出されるが、「安産」も二例見られる。江島其磧には『けいせい哥三味線』（享保十七年）にも、

小女郎が思ひたゞならぬ身の便り泣て明さぬ夜もなく。恋し〜と思ふ月日も立て。かゝる思ひの中にやす〜と平産して。玉のやうなる女の子（二）

とあり、『傾城禁短気』と同様「安産」もみとめられる。

さらに時代を追って「平産」を見て行くことにする。

『紀海音の』けいせい手管三味線』（享保十一年）に、

平産したら人しれず。其まゝつれてきてくれい。…(略)…さんじよへゆきてお守りを。ひたいへよするとたち
まちに。平産の子をかきいだき(二)

文耕堂・長谷川千四の『壇浦兜軍記』(享保十七年初演)に、

難儀の内の悦びと阿古屋が平産。あたり近所の介抱にて漸すくだゝせ(四)

文耕堂等の『ひらかな盛衰記』(元文四年二七三九初演)に、

義盛は願のまゝ巴を汝に預くるぞさりながら。平産の子男シ子ならば朝庭の恐れ。義仲の名を包汝が子とし和田
の家を相続すべし(一一)

仏教説話の『弥陀次郎発心伝』(明和二年一七六五)に、

去冬ヨリ懐妊シテ、已ニ今年三月二五月ノ着帯セシカバ、宣貞夫婦大ニ悦ビ、平産ノ月ライマヤ遅シト待モ、
トケシナク、漸ク秋八月十五夜ニ到ツテ、一男子ヲ平産セリ(三)

同じく仏教説話の『善悪業報因縁集』(天明八年一七八八)に、

其翌日になりければ、申せしに違なく御平産ありけり。御出生は男子也(二)

談義本の『楚古良探』(明和五年)に、

時夜妻。平産仕り。しかも男子にて。大慶二候(二)

近松半二等の『伊賀越道中双六』(天明三年初演)に、

去り状取ふが後テ連レが這入ふが。其お子さへ御平産なされたれば。切ツても切レぬ血筋の縁(五)

それぞれに「平産」がみとめられるが、『善悪業報因縁集』には「安産」も四例見られる。

十九世紀に入っても「平産」は、例えば山東京伝の読本『浮牡丹全伝』(文化六年一八〇九)に、
長き病に疲れ給ふ御身にては、御産の程もおぼつかなし。少しもはやく快気ありて、平産をし給へかし(三)
のように見られる。この作品には「安産」も二例みとめられる。また、『本朝酔菩提全伝』(文化六年)では「平産」

一例に対して「安産」の方がしばしば用いられている（九例）。

たとへ、某それがらは不孝ふかうの罪つみで、狂死くるひじにをいたすとも、かた身に残す腹はらの子こは、平産へいさんをいたすやう、何なにとぞお守まもりくたされかし（一）

曲亭馬琴の『椿説弓張月』（文化四〇八年）にも、

御平産おひらさんのおん祈いのりは、仰おほせを待まちずして、年来としなごこれを修行しゆぎやうせり（続篇四・三十九回）

のように「平産」は見られる。しかし、馬琴はジャンルの如何を問わず「安産」を用いているようである。ただ、日記で馬琴の息子宗伯が代筆した箇所には「平産」（五例）が用いられている。⁽⁵⁾しかし、宗伯は「安産」（七例）も用いている。

一昼後、芝田町山田宗之助内義使札。お路平産悦也（文政十一年（一八二八）二月廿六日）

昼前、川西主馬太夫来ル。お路平産之悦也（同 十一年三月八日）

いずれも「安産」についてはあとで触れることにする。

その他、『続俳家奇人談』（天保三年（一八三二））に、

旅店りよてんの女房その夜産所に臨めるに、二人の叟おきなを出家なるべしとおもひ、とみに安産の符を乞ふ。隣いとやすき事

なりとて、盃さかづきに符の一句を書いて遣はしけるが、早速さつそく平産の悦びありて、亭主ただちに出てて兩人を九拜す（中）

「平産」のほかに「安産の符」も見られる。

また、十返舎一九の人情本『清談峯初花』（文政二年）には「平産」が四例あるが、「安産」もみとめられる。

ゆな月満ゆなつきみて男子なんしを平産へいさんしければ、福六夫婦ふくろくふうふの悦たのしみび大方ならず（初編）

とのゝ御意ごいにかなひ、終つひに御情ごじやうにあづかり、若わとのを平産へいさんし、いよく貴籠きかごにほこりけるが（後編）

さらに、書翰しよくわんに見られる例をあげておく。

廿六日之寅刻至極平産、うぶ声大丈夫に御座候故、例の男子と存（母梅廳・奉庵宛頼山陽書翰、文政八年六月三

日)

梨影も産前廿五日の夜迄、家内世話、立タリ居タリ、休みなしに働居候。それ故、平産と相見え(同)

お卷平産之事昨朝半久家内発足の節申上候間御承知被下候御事と奉存候(菊池民子(『巻の母』宛大橋訥菴書翰、安政二年(一八五五)十月十日)

四

「平産」にくらべて「安産」の出現はかなり遅れるようである。『言経卿記』に見られる次の例(6)が早いのではないかと思われる。

一、去比南庄伊勢屋へハヤメ葉・愛洲葉遣了、安産トテ両瓶等送了(天正十三年(一五八五)閏八月十六日)

また、既に「平産」のところで触れたが、指摘した以外に伊達綱宗の書状に次のように「安産」がみとめられる。

一、十五日之書状(同日之祝儀申聞、令祝着候、上屋敷奥方安産悦之段申遣候儀、示給候(松陸奥守宛、天和元年八月十九日)

然者過ル六日奥方安産、女子出生、母子息災(陸奥守宛、宝永二年二月廿八日)

また、『地藏菩薩心験新記』に、

然(しか)れども我(わ)が慈(じ)濟(さい)力(りき)を運(ゆ)し、重障(ぢゆうしやう)を転(てん)じて安産(あんざん)を得(え)せしめん(中本)

すなわち

即(すな)わち仏前(ぶつぜん)に香灯(かうとう)を庀(そな)へ、精誠(せいせい)を抽(ひ)て、安産(あんざん)をぞ祈(いの)られける(中末)

と「安産」が見られるが、同時に「平産」もみとめられることは既に述べた。

『新井白石日記』には、

二日の夜、西丸当番目付中より八重姫君様(八戸市字雲、綱吉養女)今夜被遊御安産候付、明日御本丸惣出仕候、可被得其意候(宝永(生死交代姫)

五年二月)

とあり、『傾城禁短氣』にも、

こなたで平産させられて出生の子を此方へつかはさるゝや、但し此方へ母共に預り、手前にて安産いたさせ、
体を取て、産だからを戻しませふや (四)

安産の時は左右をなされ。又近日見舞に参らふと (四)

のように「安産」が見られるが、同作品には「平産」(七例)もある。しかし、両者の間には使い分けはみとめがたい。
また、『けいせい哥三味線』にも、

追付安産せば。めつきりと祝儀をとらせて悦ばせんと (一)

のように「安産」があるが、同作品には「平産」もあることは前に触れた。

先に『地藏菩薩心験新記』の例について見たが、他の仏教説話にも「安産」がしばしば用いられている。例えば、『瑞心塵露集』(享保十八年)に、

四 同寺ノ医王如来眼病ノ妙薬ヲ教ヘ玉フ事 附タリ本尊ノ御符ニテ狂気痊リ安産ヲ得ル女ノ事 (二)

程ナク安産ノ紐解テ、目出度端正ノ男子を生落シ (二)

急ギ護邦山ニ上リ、僧本誓ニ謁シテ安産ノ加持ヲ願フ (一六)

『満霊上人徳業伝』(宝暦七年一七五七)に、

世人臨産に苦しむもの、上人の十念をうくればことごとく安産せずといふことなし (十五)

紙にて帯を数々こしらへ是を懐胎の女にあたへ給ふに、皆安産せずといふ事なし (十五)

『善悪業報因縁集』(天明八年)に、

女房安産せし処、鱧の首ばかり、おびたしく産しかば (一)

先安産の悦に参し次に我心底を述、(二)

妻懷妊して臨月安産す (五)

それぞれにみとめられる。

また、咄本にも、例えば『軽口耳過宝』(寛保二年一七四二)に、

新参のおなごを産の見まひにやりける。その返事に、無事で安産いたし、殊に門開で御ざる(御命講)

『聞上手』(安永二年一七七三)に、

産婦さき付て、もしこれへ、わしが安産したとて、どふマア青銅の鳥居ができるものぞ(銅の鳥居)

のように見られる。

さらに、ジャンルに加え、刊行や成立年時を考慮して「安産」の例を見て行くことにする。

洒落本『白増譜言経』(延享元年一七四四)に、

金さへ出来たら小日向の姨子か疝氣がおこつたと成とも深川の兄貴が安産したと成りとも嘘をついて(三)

加藤枝直の日記に、

七月十四日、晴暑甚…(略)…一、昨夜九ツ時およの安産、女子出生為_レ知来(延享元年)

十七日、曉雨止涼敷、一、いせへ書状、左門治妻安産之事申遣(同)

十二月十八日、晴、一、河島了悦へ安産之悦に人遣(同)

とあるが、同日記には「平産」も用いられている。

十二月十七日、晴、一、今朝おべん平産、女子出生(延享元年)

さらに、近松半二の『役行者大峰桜』(宝暦元年初演)に、

我等が嘯は此月産月。安産の御祈禱を頼みます(四)

並木正三の『幼稚子敵討』(宝暦三年上演)に、

左様でござります。桂様の儀は此度大坂表に於て、疱瘡安産の守りをお出し被遊たとの儀(口明)

平秩東作の『水の往方』（明和二年）に、

彼山賤薬一貼をあたへ、夫婦服用しける年より男子出生して毎年の様に三人まで安産して（四）

談義本『古今百福談』（明和九年か）に、

たかひに忍び逢ふ程。懐胎して。近々に安産あるへき様子なれば（四）

『道二翁道話』（寛政七年一七九五）に、

双すると、腹の中と外の氣と合躰するゆへ、心安ふ安産する。…（略）…又雪隠へ往た時も同じ事じや。無理に氣

張るものじやない。あなた次第にしてゐると、心能ふ御安産なさる（下）

『東海道中膝栗毛』（享和二年一八〇二）文化十一年）に、

やうくもひきのまへのあはせめをひろげると、はまぐりはほつたりおちる 北八「ハ、ハ、ハ、まづは、御安産でおめでたい（五編上）

コレハおきやくさま。おやかましようござりませう。先わたくし妻も安産いたしました（五編追加）

その他五編追加に二例、同じ一九の『誹語堀之内詣』（文化十二年）に、

安産の守あるひは病難除の守何でも此守ひとつを。病人らしい人なら病難除。孕んでゐる女中は安産の守（下）

小枝繁の読本『催馬楽奇談』（文化八年か）に、

夫婦まずく書写の御仏を祈奉り、安産あらんことを願ひしに（四）

鶴屋南北の『お染久松色読販』（文化十年上演）に、

貞昌「ヤ、ハ、ハ、ハ、刀の折紙。薬の包はこりやコレ子安の安産の」（中幕）

根岸鎮衛の随筆『耳囊』（文化十一年）に、

彌々右の薬を用ひけるに、事故なく安産して、出生は死体なれど母は別儀なかりける故（二）

一夜の交りに懐たいなしけるぞ是非なき。其後安産してうみし子は夫の方へ遣し（七）

鈴木牧之の『北越雪譜』（天保七年〜十三年）に、

其年九月のはじめ安産あんさんしてしかも男子なりければ、掌中てのちに珠たまを得たる心地こころにて（上）

『浮世の有さま』（文政十三年頃）に、

産婦大に心をつかひし事なれば、乳少ちちすくしも出ざるに、折節おりふし此家こゝにても此頃に安産して乳卓山ちやくざんなりしかば、母子共

恙つがなし（御蔭耳目第一）

それぞれ「安産」がみとめられる。

次に、書翰における「安産」について見てみよう。まず、大田南畝に、

一、お冬事先月廿二日夜酉之下刻安産、殊に男子出生の由、至て安産にて母子共丈夫之旨御申越、目出度大安堵
いたし候（島崎金次郎（↑南畝の弟）宛、享和元年十一月二日）

一、私媳婦西年初産男子候節は乳沢山に出申候。当七月十九日女子出産いたし候処、私発途前彼是取込里へあづ
け、あの方にて安産いたし候（小川文庵宛、文化元年十月十二日）

とあり、曲亭馬琴には殿村篠齋宛のものに、

先月廿二日、媳婦安産いたし男子出生、嫡孫ヲ得申候（文政十一年三月廿日）

御媳婦様、御臨月より一ヶ月はやく、正月廿日ニ御安産被成（天保六年二月廿一日）

とあり、渡辺華山にも、

夫人御安産之処御女子降誕、誠御先祖様之御瞑助と余威感涙に不堪候（真木定前宛、天保三年三月廿六日）

のようにみとめられる。

ここで、雑俳の一の川柳における「平産」と「安産」の使用を『誹風柳多留』（明和二年〜天保九年）について見る
ことにしよう。岡田甫校訂『誹風柳多留全集・索引篇』（三省堂）に拠ると、「平産」は、

平産の折も折とて飯がきれ（四編、明和六年）

とある一例だけであるが、「安産」は七例、「御安産」の言い方が八例あり、圧倒的に「(御)安産」である。

安産の御使者ハ家中での乗り人(七篇、安永元年)

安産をしらせなからに歟を借(二七篇、寛政十年)

御安産あし辺ニ田鶴ノ啼時分(二九篇、寛政十二年)

御安産宿衾ハ弓の腰で抱き(一三六篇、天保五年?)

山東京伝、曲亭馬琴についてはそれぞれ各ジャンルにわたって「安産」がしばしば用いられているので、その出現状況をジャンル別に見ることにする。

まず、山東京伝の作品について草双紙(7)から例をあげると、

程なく臨月に至り、安産して、玉の如き男子を産みけるが(両頭筆善悪日記・上、寛政十一年)

安産の御守は産んだら抱かれまい(吞込多靈宝縁記・下、享和二年)

利が利を食ひ、金が子を生む。安産の守を出す(悟術迷所独案内・下、享和三年)

草葉の陰でも、たゞ安産を祈るなりとて(安積沼後日仇討・中、文化四年)

密かに調伏して本妻の子を流産させ、私は安産して産出せし子は即ち軍作にて(岩井櫛桑野仇討・五、文化五年)

五年)

此御男子は村之進殿の宅にて、有明が安産せし殿の御胤なるは(妬湯仇討話・前編、文化五年、他にも一例ある)いよ／＼男子を安産せば、義政公に願ひ奉りて、その子に家督を継がすべしと(累井筒紅葉打敷・六、文化六年、

その他二例ある)

八つ橋は程なく安産して、女の子なれば名を小ひなと付けしが(岩戸神楽剣威徳・前編、文化六年)

玉琴が安産をして後に結納を遣はしてすぐに迎取り(桜ひめ筆の再咲・前編、文化八年、他にも一例ある)

また、山東京伝の読本での「安産」の使用は次のようである。

神仏に安産を祈り、臨月遅しと待侘けるが、夢のごとくにその年もくれ、建久三年壬子の三月十日といふに、玉のごとき女子を安産しけり（桜姫全伝曙草紙・二、文化二年、他にも一例ある）

朝夕の起臥日々の食物にいたるまで、よく心をつけて安産をいたすべし（梅花水裂・上、文化四年、その他にも三例ある）

かく長病に疲たる身にはべれば、とても安産はおぼつかなく（浮牡丹全伝・三、文化六年、他にも一例ある）
恙なく安産をしたりとも、女の身一つにて、いかで養育なるべきぞや（本朝酔菩提全伝・一、文化六年、他にも

八例ある）

貞直は味方の勝利の註進を聞うへに、此安産あれば転よろこびにたへす（双蝶記・一、文化十年）

次いで、曲亭馬琴の作品についても草双紙（8）から例を見て行くことにする。

いく程もなくおよつ安産せしが、しかも双子にてはじめ生れしは男、のちに生れしは女子なり（敵討雑居寝物語、文化三年）

おつゆすでに安産してしかも男子出生したりければ（大師河原撫子話（9）、文化三年、他にも七例ある）

かくて芋環はその年の冬安産して男子誕生したりしかば（照子池浮名写絵、文政五年）

命にかけて白箸とのを確かに預かり奉り、安産させてその御子を守り育て奉り（牽牛織女願糸竹、文政十年、他にも三例ある）

読本にも「安産」がしばしば用いられている。

冬の半に至りて、桜木安産す、生れたるは女子にて（旬殿実実記・一、文化五年）

此彼共に安産して、和殿の子男児にて。某が子女児ならば。襦袢の中に云号けて（青砥藤綱摸稜案・前集一、

文化九年）

且這山なる神漿仙果を、たうべることを得たりしかば、姉も妹も胎内なる子の、猛可に大きうなりたる也。恚れ

ば安産遠からず（南総里見八犬伝・九輯一〇五回、天保七年）

且力二尺八が、遺腹の子あるを知らず、その期を過して安産せしは、いよ／＼奇異といひつべし（同・九輯一

〇六回、天保七年）

媳婦の事を告げ安産の祈禱を請ひしに、件の聖うち聞て、そはいと易き薬方あり。竊に蛇脱を、煎じて媳御に飲したまはゞ、安産疑ひなきもの也（近世説美少年録・一輯十回、文政十二年）

隨筆『玄同放言』（文政元年～三年）にも、

その呪法。譬へば難産のもの為には。地藏さま。何がしが妻に。安産させて玉ひね。南無阿彌陀仏。南無あみだ仏。と唱ふるのみにて立地に安産す（三）中）

とある。

馬琴の日記にも「安産」がよく用いられている。

土岐村元立老入来。おみち安産よろこびの為也（文政十一年二月廿三日）

清太郎妹、里方ニて安産のよしニ付、守袋・はま弓等、いハひとして、遣之（文政十二年十二月廿八日）

一、田口久吾妻安産、男子出生ニ付、右祝義として、今日お百罷越候様申付（天保二年四月廿六日）

また、宗伯代筆の箇所にも「安産」が見られることは「平産」のところと触れたが、具体的には次のようである。

早朝、渥見使来ル。今曉お久和安産之趣為知ニ付、五半時、宗伯渥見江赴（文政十年十月廿一日）

一、今朝四半時、お路安産、男子出生。今朝より催生腰痛有之ニ付、四時過、穩婆呼寄セ、無間も分娩、母子安

泰、殊之外軽産也（文政十一年二月廿二日）

江戸時代後期、文政頃に成立を見た人情本になると出現するのはほとんど「安産」で、今日と同じ状態を呈している。

十返舎一九の『清談峯初花』に、

ゆな安産せしうへは、そなたの子となし養育し（初編、文政二年）

二世南仙笑楚満人（為永春水）の『婦女今川』に、

またおしつけ御台所が御安産があると、やかましくつて茶所ではねへ（六、文政九年〜十一年）

為水春水の『春色梅児誉美』に、

後々きけばその女中、お種を安産いたされて、それをつれ子で、いづれへか縁づかれしまで御聞なされ（四、天保三年〜四年）

曲山人の『仮名文章娘節用』に、

産の手当を何くれとのこるかたなくまめだちて安産をこそいのりける（後篇、天保元年〜五年）
それぞれにみとめられる。さらに「安産」の見られる作品と所在を示すと次のようである。

『花鳥風月』（二上）、『いろは文庫』（二編十一回）、『湊の月』（前編上）、『春色江戸紫』（初編上）

五

以上、「平産」、および「安産」の現われ方について一通り見てきた。それをまとめると次のようになる。

「平産」は十世紀半ば頃から見られ、以後、公家や貴族の日記・記録に見られ、十六世紀後半の室町時代末に至るまでこれらの特定の資料に集中する状態が続く。既に公にされている古記録類のデータベースや筆者の調査結果に照しても「平産」がみとめられる資料には偏りがある。十七世紀の江戸時代に入ると、「平産」は文学作品にも、しかも種々のジャンルにわたって用いられるようになる。

他方、「安産」は、今のところ山科言経の『言経卿記』（天正十三年一五八五の記事）に見られるのが古い例である。しかし、十八世紀に入ると文学作品等にも見られ、「平産」と併用されるようになる。十九世紀以降は次第に「安産」が優勢になり、それに伴い「平産」が衰退する。最終的には今日では「平産」は用いられなくなった。

次に、辞書の類で「平産」「安産」がどのように扱われているかを見ることにする。

一種の女性向け教養書である『女重宝記』¹⁰（元禄五年一六九二刊）五・五の「女詞字等類并に正字」に、

一、やすく易々 するく

一、よろこび悦 さん所産所

御へいさん 平産

のように「平産」が見られる。同書には説明の言葉としても「平産」が用いられている。

懐妊の後数月して大血下りても平産する事あり。これを漏胎といふ。（三・三）

又子安貝といふ貝あり。この貝に早めを入れて吞めば平産なり。（三・十三）

一、産婦の右の足の小指の尖の頭に、麦粒ほどにして、三炷灸すれば、いか様の難産にてもそのまま生れて、

平産するなり。（三・十三）

苗村丈伯の『世話字節用集』¹¹（元禄五年刊）にも、

海馬 難産のとき産婦乃手ににぎれば平産する也

また、『病名彙解』（貞享三年一六八六刊）にも説明の語に「平産」が用いられている。しかし、こちらは正常な分娩（正産）という医学的な意味に重点のある用い方になっている。

横産 平産ニアラズ手足ヨリ先へ生ル、コ也

偏産 平産ニアラズシテ逆偏ナル産ライヘリ

ところで、『書言字考節用集』（享保二年一七二七刊）には、

（平）産 又云 安産（肢體・気形）

とあり、「平産」が主見出しであるが、「安産」が言い替えとして記載されているのが注意を引く。

「平産」「安産」のおおよその使用傾向をさぐるために節用集、その中でも簡便さで迎えられた早引節用集（二いろ

は「分けにし、さらにそれを音節数順に配列した体裁をとる）の一、二について見ることにする。

平産 （平産） 安産 （安産） 早引節用集 宝暦二年（一七五二）刊 （12）

平産 （平産） 安産 （安産） 早引節用集 宝永五年（一七七六）刊

平産 （平産） 安産 （安産） 早考節用集 天明五年（一七八五）刊

平産 （平産） 安産 （安産） 早考節用集 天明五年（一七八五）刊

「平産」とともに「安産」も見られるようになる。これは四で見たように十八世紀に入ると「安産」が次第に用いられるようになった状況を反映していると考えられる。

これまでも述べてきたように、古くから見られる語が「平産」で、「安産」はこれに比べてかなり遅れて生じた語であることを指摘した。

それでは、同義の関係にある「平産」「安産」が併存する場合には両者に何らかの違いはなかったであろうか。

そこで、江戸前期の往来物である『書札調法記』¹³（元禄八年刊）における「平産」と「安産」の扱いについて見てみよう。凡例に、

一、…（略）…進状返状ともに上中下をわかち、上江遣状にハかしらに貴としるし、中遣状にハかしらに同と

しるし、下ハ下と書して、しかも書状毎に替字をことごとく入れて、又かたはらに高下のしなをしるして童蒙のた

すけとする耳

とあり、具体的に巻四の「平産之所へ遣状」（この「平産」は標題の提示を意味するもので、尊卑等の待遇価値にかかわらない。目録の方の表示は「産」所へ遣状」とあり、この言い方がいわば理にかなっている）に、「中人同程度の身分の者」、「下輩身分の低い者」に遣る例文として、それぞれ、

① 御内儀様御平産 御娘子御誕生之由目出度存候…（略）…

タイラカニウム

① 御内方安産被^レ成^レ殊更^レ男子生^レ出^ルの由目出度存候[…] (略) …

とあり、「中人」の例文のあとに「平産」の「替字」として次のような語があげてある。

亭産^{ていさん} 泰産^{たいさん} 平誕^{へいたん} 安産^{あんさん} 安々^{やすく}

『書札調法記』の模範文例では、同輩の者に対しては「平産」を用い、下輩には「安産」を用いているところからすれば「平産」の方が「安産」よりも敬意が高かったものと考えられる。ちなみに身分の高い者（貴人）に遣る例文は左のようである。

② 御代継御誕生被^レ遊殊更御若君にて目出度御儀に奉^レ存候[…] (略) …

待遇の度合に違いがあつた可能性があるにしても、同輩の「平産」の替字に見られる「安産」はどう解釈すればよいのであろうか。同じ『書札調法記』巻六に「書状言葉字高下」があり、その中の「貴人江之分」から注記を摘記すると、

〔馳走〕について、「結構成 御丁寧成」とあり、これも御の字なければ中也

御咄ハ上下につかへども被^レ遊、被^レ下、御機嫌能^レ入れハ上になる也

〔「察し」について、「… (略) … 奉^レ推察[…] 推量仕候」とあり〕、推察推量ハミな上下をしなめてつかへども、奉と仕候など、かけハ上になる也

などである。これらの注記を参考にすると、同じ語（形）でも程度の高い敬語を添えたり、尊敬の接辞「御」を付けたりすれば身分の高い人に使用しても差し支えないことがわかる。したがって、同輩の書状例文の「平産」の替字に見られる「安産」は、実は例えば、

御安産被^レ成^レ候[…]

のような言い方の中で用いられるものであると想定すれば一応説明がつくかと考えられる。

同輩と下輩との間で、特に書翰においてどのように言葉遣いが異なっていたのかについては調査が及んでいないの

で断定は避けなければならないが、身分の高い人（貴人）に対しては同輩および下輩では相当に違っていたのに対して、同輩と下輩との間ではそれほど差はなかったのではないかと考えている。なお、後考に待つことにしたい。

最後に、「平産」「安産」と同義の関係にある語の「易産」「泰産」「平誕」等について触れることにする。

二で、『後愚昧記』永徳元年八月五日の条に「平産」とともに「易産」も見られることを述べた。「易産」は「いざん」の見出し語形で『日本国語大辞典』（二版）に採録されており、『満濟准后日記』永享五年_{一四三三}閏七月廿四日の条に見られる例があげてある。

「易産」は、他に『言経卿記』天正十年_{一五八三}三月廿日の条に、

一、御室ヨリ易産御符・阿茶丸御護等持被下了

とあり、天正十年三月三十日の条にも、

一、御室御所へ書状進上了、北向易産之事付テ、御祈念并御符拝受之間

とある。また、『邪咒呪禁法則』₍₁₄₎（貞享元年_{一六八四}刊）に、

易産符：（略）：此符ハ太元明王秘符トテ手斗リ指シ出シタルモハウニ生ル、也 加持ニハ薬師ノ小咒易産ノ小咒

千遍ツ、又云ウミ／＼ソワカ百遍ヲンキリ／＼ソワカ文殊ノ真言百遍去テ紙ヲ敷テボクリ落ス也

とある。以上いずれも安産の護符のことである。さらに『地蔵菩薩応驗新記』に、

此菩薩に詣て、懇に易産をぞ禱ける（下末・三）

とある。

同じく二で「平産」の用例がみとめられる『地蔵菩薩靈驗記』には「泰産」の語もある。

貴賤老弱奔馳シテ或ハ延命ヲ祈或ハ泰産ヲ求貧乏無福ノ輩ハ財宝盈溢ヲ願 サレバ是ノ菩薩ハ女人泰産身根
具足衆病悉除寿命長遠聰明知恵財宝盈溢衆人愛敬穀米成熟神明加護證大菩提等ノ十種ノ福ヲ得セシメムトノ

御誓ナレバ (十四・一)

『延命地藏経』の記事により、地藏菩薩に「女人泰産」を初めとして引用箇所に見られるように十種の福德がある
とされ、その功德を願って地藏菩薩信仰は民間に広くおこなわれるようになったと考えられる。

山東京伝の読本『双蝶記』にも、

更級を辻堂にたすけゆかしめ、堂中の額をあふぎ見るに、子安地藏尊とかきつけあれば、「これ産所に幸ひの表事」

とよるこび、「地藏菩薩十種の福を得せしめ給ふうちに、一者女人泰産と、地藏経にもあれば、仏前を穢とも、

さまざまにくみ給ふまじ」とて (一・一)

のように見られる。「泰産」は、『書札調法記』の「平産」の替字にもあるが、この語は本来「女人泰産」の言い方に
発するものであったと考えられる。

「平誕」も『書札調法記』の替字に見られるが、この語がどのように用いられたかは情報が乏しく詳しく知ること
ができない。『古事類苑』礼式部・誕生祝の記事の中に、『花園院御記』に、

男子平誕生、尤以珍重、仍令差進使者一也 (正中元年二二五十一月卅日)

とある例があげてある。ただ、『史料纂集』所収の『花園天皇宸記』には「誕生」とある。「誕生」は日本では古く皇
子について用いられることが多く、また必ずしも皇子に限らない時もあるが、その場合も高貴な身分の者について用
いられた。「平誕」も「誕生」と同じような用いられ方をしたのではないかと考えられる。

終りに、用例の検索や点検において鈴木芳明氏 (早稲田大学教育学部非常勤講師) の御助力を得たことに謝意を表
する。

注

(1) 鈴木丹士郎「懷旧樓筆記」の漢語語彙 (『文芸研究』六七 昭和四六年三月)

- (2) 佐藤喜代治「中世の漢語についての一考察」〔国語語彙の歴史的研究〕（明治書院）に所収
- (3) 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊』に拠る。
- (4) 近松の浄瑠璃には、「安産」は見出せないようであると述べた。しかし、『吉祥天女安産玉』(宝永元年一七四四上演)という作品が近松の歌舞伎狂言にある。「こやす(子安)」は、子をやすらかに産む意であり、「安産」に同義の「こやす」を振り仮名として当てたものである。十八世紀に入ると「安産」も次第に用いられるようになった時期であるが、「こやす」が当時としては一般に通用していたものと思われる。
- (5) 杉本つとむ『馬琴、滝沢瑣吉とその言語生活』(至文堂) 53ページ。
- (6) 『時代別国語大辞典 室町時代編』(三省堂) に採録。
- (7) 山東京傳全集編纂委員会編『山東京伝全集』一巻の黄表紙1・九巻の合巻4(ぺりかん社)に拠る。
- (8) 板坂則子校訂『馬琴草双紙集』叢書江戸文庫33(国書刊行会)に拠る。
- (9) 長谷川雄大・木村薫(翻刻)『専修国文』八七に拠る。
- (10) 長友千代治校注『女重宝記・男重宝記 元禄若者心得集』(社会思想社、現代教養文庫)に拠る。
- (11) 『世話用文章』近世文芸資料類従 参考文献編9(勉誠社) 所収に拠る。
- (12) 高梨信博編『改編・新撰 早引節用集』(私家版)に拠る。その他の早引節用集は『節用集大系』(大空社) 所収のものに拠る。
- (13) 近世文芸資料類従 参考文献編5(勉誠社) に拠る。
- (14) 『重宝記集一』近世文芸資料類従 参考文献編14(勉誠社) 所収に拠る。

〔補遺〕脱稿後、杉本つとむ『井原西鶴と日本語の世界―ことばの浮世絵師』(彩流社、二〇一二年五月刊)により、西鶴の『武道伝来記』に「安産」の例のあることを知った。その例を次に記す。「首尾心かけぬるに女の身は是非もなくつみに懐胎して。物思ふうちに月かさなり男子を安産しけるに」(八・一)